



Title	ゲーテの宗教観
Author(s)	島崎, 暉久
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44562
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	しま しま てる ひさ 島 崎 暉 久
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 18074 号
学位授与年月日	平成 15 年 7 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	ゲーテの宗教観
論文審査委員	(主査) 教授 林 正則 (副査) 教授 里見 軍之 助教授 三谷 研爾

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、幼少時から最晩年にいたるゲーテの、旧約・新約聖書ならびにキリスト教史・教会史との関わりをその生涯と作品に即して詳細に辿ることで、ゲーテの宗教観、あるいは神観の核心に肉薄しようとした試みである。緒論と 6 部から構成されており、B 5 判 602 頁、400 字詰原稿用紙換算で約 2700 枚に及ぶ大作であり、1997 年 7 月に朝日出版社から刊行されている。

緒論では、まず論者の研究姿勢、方法論が提示される。論者の言う「植物成長的ゲーテ研究」がそれであって、ゲーテという木の中に入り込み、ゲーテとともに成長する、つまり、一切の前提を捨ててゲーテの言葉に耳を傾ける姿勢だとされている。今ひとつ重要なのは、今日の日本にとってゲーテ研究が持つ意味を絶えず問いかけつつ、日本におけるこれまでのゲーテ受容の歴史を徹底的に検証し直すことが、論者の意図的な方法論とされている点である。

本論文の基礎をなす第 1 部の「聖書のゲーテ的受容」の章では、『詩と真実』、『西東詩集』の「注解と論考」などを仔細に検討することによって、ゲーテと聖書の深い関わりが具体的に究明されている。「二つの重要な聖書の問題」、「教会史の問題」の二つの章は、教会史全体を俯瞰し、ゲーテがこれといかに取り組んだか、とりわけアルノルトの『教会と異端の歴史』が彼に与えた大きな影響が明らかにされている。

第 2 部では、『詩と真実』の記述に基づいて、ゲーテ青年期の宗教思想が究明され、そこでは啓蒙主義の理神論と敬虔主義(ピエティズム)の人格神とが激しくぶつかり合い互いにしのぎを削っていたことが指摘される。次に『牧師の手紙』を扱った章では、それがオリゲネス的宗教観をもって当時の倒錯した教会省の信仰を断罪したものであることが解明されている。

第 3 部では、ゲーテのピエティズム体験をいっそう詳細に解明するべく、青年ゲーテの宗教的な導き手でもあったカタリーナ・フォン・クレッテンベルクの手記と目されている『美しい魂の告白』(『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』)の分析が行われ、ピエティズム信仰の内実が明らかにされるとともに、それがゲーテの教養理念とは本来異質なものであったことが指摘される。また、ゲーテのフリーデリケ体験に関しこれまで「巨人主義」という視点から論及されることが多かったのに対して、ここでは『詩と真実』の記述と戯曲『クラヴィーゴ』を重ね合わせることで、そこに浮かび上がって来る深刻な人間存在の罪の姿が示されている。

第 4 部では、まずヘルダーとの出会いの意義が考察され、続いて『若きヴェルターの悩み』の作品解釈が試みられる。そして、ヴェルターの言う「全愛者の息吹き」としての抽象的な「愛の神」がヘルダーの汎神論・内在神論に直結するものであること、また、それがいかにヴェルターの間人像と行動に深刻な影を投げかけ、思想的な破綻をもたらしたかが描き出される。さらに、リリー・シェーネマンとの婚約とその破棄をめぐるゲーテの内的葛藤の根底に潜

んでいた神観の問題性、「罪の問題」が浮き彫りにされている。

続く第5部では、ゲーテの古典主義期が考察の対象とされている。まず、ヘルダーの主著『人類史哲学考』に展開されている宗教観が聖書の思想からいかに隔絶したものが指摘されるとともに、ヘルダーのフマニテート思想の芸術的開花と言ってよいゲーテの戯曲『タウリスのイフィゲーニエ』が聖書の世界観と対比して考察され、それがヨーロッパの精神史を貫くヘレニズムとヘブライズムに関わる問題であることが指摘される。同じ視点から『親和力』、『修業時代』、『遍歴時代』が順次取り上げられ、この部の締めくくりとして、ゲーテの宗教思想が H.A. コルフ『ファウストの信仰』と E. プルンナー『われわれの信仰』という 20 世紀ドイツ思想の重要な部分を担った二つの著作においていかに捉えられたかが考察されている。

第6部は、『ファウスト』に関する論考で、論者が最も力を注いだ部分である。これまでの研究のほとんどすべてが、新プラトン主義的な汎神論をキーワードに理想主義的なファウスト像を描き出し、ファウストにおける「罪」と「悪」の問題に目を塞いできた点が指摘される。「『天上の序曲』とヨブ記」の章では、両者の類似点と相違点が克明に解き明かされ、ファウストの神が「生成の力」としての「神性」に過ぎない、まったく非聖書的な神であることが指摘される。「ファウスト第1部」「グレートヒェン悲劇」の二つの章では、ゲーテの生涯を貫く「宇宙発生論的流出宗教」に基づく無目的な活動性、やみくもな自我の拡大がもたらす悲劇が論じられ、「ファウストの信仰は悪魔を内に包み込むが、グレートヒェンの信仰はそれを許さない」と述べる。「ゲーテと無教会主義」の章では、ゲーテ的無教会主義と内村鑑三の無教会主義の相違が克明に描き出され、さらに本論文を締めくくる「ゲーテの信仰」の章では、「私は四福音書を全く真正なものと信じている」というゲーテの言葉にも関わらず、彼はついに聖書の生命に触れることはできなかつたと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の貢献は、ゲーテ少年期の習作からエッカーマン『ゲーテとの対話』に収められた最晩年の発言にいたる膨大なテキストの全体に深く分け入って、ゲーテの宗教観・神観をその根源にまで遡って解明した点にある。ゲーテの宗教観について、本論文ほど徹底的に論じたものは、日本は言うに及ばず、世界でも稀といってよいであろう。その意味で、本論文がドイツ語に翻訳されドイツで刊行されたならば、大きな反響を呼ぶことは必定であろう。

とりわけ、ゲーテ 16 歳の折の詩『キリストの地獄行き』、24 歳の折の教会史に関する論文『二つの重要な聖書の問題』、また戯曲『恋人の気まぐれ』、『同罪者』が宗教的観点から論じられたのは、内外のゲーテ研究を含めて本論文がはじめてである。また、スピノーザをめぐるのヤコービとの対決、またラーヴァーターとの友情破綻の悲劇を三者の宗教観に絞ってこれほど詳細に論じたのも、本論文がはじめてである。

しかし、何と言っても本論文の圧巻は、『ファウスト』論であって、旧約聖書「伝道の書」の著者コーヘレトにファウストの原像を探り当て、ファウストの人間像と真正面から対立するヨブ、そしてイエス・キリストその人の姿を対峙させつつ、ゲーテひいては近代的人間像の悲劇を論じ、やみくもに「前へと突き進む (streben)」ファウストの行動を鋭く批判する論調には、論者のただならぬ気迫がみなぎっている。と同時にしかし、「ファウストがゲーテによって作り出された人物であれば、グレートヒェンもまたそうである。(中略)メフィストの世界もグレートヒェンの世界もみなゲーテの精神世界である」との一文には、一貫して苛烈な論調にもかかわらず、論者の学問的な公正さ・誠実さに触れる思いがした。

上述のことからも推測されるように、本論文の最大の特徴は、一方では論者の長年にわたるゲーテ研究と、また他方では旧約・新約聖書に対する心血を注いだ研究とを、真っ向から対峙させ、対決させるという、いわば論者の精神と身体を賭した一貫した苛烈な姿勢にあり、その底には内村鑑三の無教会主義の思想が沸き立つ奔流として流れている。そのために、ままた、神学論争に陥りそうな面もなくはないが、しかし論者自身そのことを絶えず戒めながら、あくまでもゲーテのテキストに即することに努めており、そのことが本論文に大きな説得力を与えている。しかし、論述の激しさのゆえに、ときにやや行き過ぎた論敵批判が見られたり、ままた文献学的な手続きに不備が散見する点は指摘しておきたい。

しかし、これらの点は本論文の学術的な価値を損なうものでは決してない。よって、本審査委員会は本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。